

平成 29 年度

第 69 回 上伊那教育会 夏期講習

8 月 1 日 (火)・2 日 (水) 上伊那教育会 講堂

テキスト

西田哲学選集第一巻

『西田幾多郎による西田哲学入門』

第二部「善の研究」

第一編「純粹経験」第一章

第二編「實在」第一章から第五章

講師

京都工芸繊維大学大学院 教授

秋富 克哉 先生

【開講式から】

矢澤 淳 教育会長挨拶

1 日目 (1 日) 日程

開講式 9:00～ 9:20

討議 9:25～16:45

2 日目 (2 日) 日程

討議・まとめ 9:20～11:40

講演会 13:00～14:40

開講式 14:40～15:00

今年も、この日のために、唐澤正吉先生のご指導をいただいて、今までに 4 回の読み合わせが行われ本日に至っております。そして、今日、明日と 2 日間、講師として京都工芸繊維大学大学院教授 秋富克哉先生をお招きし、唐澤先生とお二人のご指導をいただき、本年度の夏期講習会がいよいよ始まります。唐澤先生、秋富先生、よろしくお願ひします。

さて、この夏期講習会ですが、今年で 69 回を数えます。これは実に、昭和 24 年、飯島町の西岸寺で 8 月 3 日から 3 泊 4 日の日程で行われた夏期講習会に遡ります。俗に「西岸寺講習」と呼ばれるものですが、郡下の青年男女教員が企画から運営まで一切を担って行われていたということです。特に女性が積極的であったと聞いています。今年は正副運営委員長が女性です。その講習会が、哲学の講習会へと特化され、本日を迎えているわけであります。

「読む」とか「解釈する」ということは、目に見える言葉の連なりから、その言葉の連なりを生み出している奥の、目に見えない「想」(おもい)に到達しようとするのだと、聞いたことがあります。だから、「わかるまで読む」のではないのでしょうか。見えるまで読みこむことが大切であると思います。

秋富先生からは「手渡されたテキストの 1 ページ目を読んで、既に後悔し始めている方もおられるでしょうか。しかし、もう逃げられません(笑)。ともかく騙されたと思って、4 回の読み合わせ会と本番に参加してみてください。必ずや、これまでに経験のない夏を迎えられることになるでしょう。」というような意味のメッセージがありました。

もう逃げられません。テキストは確かに難解です。しかし、ここに参加している先生方の言葉をいただき、共に言葉を交わし合うことによって、今回のテーマであります「實在」ということについて、身近な私たちの日常の中に照らし、子どもに照らして、自分なりの考えを構築する・・・そんな 2 日間でありたいと思います。

私たちは、日々子どもと向き合いながら、「はじめに子どもありき」と、まず子どもを観る、子どもの言葉を聴く、子どもの行為の意味を見つめる、そのことに全力を傾けながら、常に子どものことが頭から離れない、そんな毎日を過ごしているわけですが、子どもを本当に観るとはどうすることか。子どもとの関係や、自分自身の行為や見方を振り返る、そのことが、真に「はじめに子どもありき」に通じるのでは・・・そんなふうに思うのです。

実り多き 2 日間としていただきますことをご期待申し上げ、以上、開講の挨拶とさせていただきます。よろしくお願ひします。

討議する参加者の皆さん



哲学研修を運営して下さった先生方



参加した先生方の感想

- 「善の研究」を読むだけでは解釈が難しかったものを、レポートや討議を通じて少しずつ自分のものにできた気がする。何より、学校での子ども達を思い浮かべ、自分を振り返るよい機会となった。自分の尺度で子ども達を見るのではなく、いつも両方の見方をもっていることを忘れずに、日々子どもと様々な体験をしていきたいと思った。
- 「矛盾と統一」というテーマの下、自分の普段の子ども達に対する接し方やルールというもののとらえ方等について改めて考えることができた。討議を通してみると、一つの文章を読んでも様々なとらえがあり、経験があつてこそ語られる想いもあり、非常に貴重であった。

秋富先生 講演会

演題 『 住むことの哲学 一芭蕉、不住の住 』



講師 秋富 克哉 先生



講師紹介 林 武司 研修部長

講演を聴かれた先生方の感想

- 講演会のみ参加でしたが、とても勉強になりました。「ある時は進むで人に勝たむことを誇り…これが為にさへられ…つひに無能無芸にして、ただこの一筋につながる」この思いにすごく惹かれ、そして共感できた。そして、「造化にしたがひ、造化にかへれとなり」行としてありのままを大切に。今回初めて芭蕉の不住の住、哲学、思い（本質）にふれることができたような思いです。講演を終え、すごくさわやか、晴れ晴れした気持ちとともに、秋富先生のお話をもっとお聴きしたい思いとなりました。今回のテーマ「住むことの哲学」→我々の平凡な日常の生活が何であるかを考えることが、深い哲学と学び、とても良いテーマだと思いました。
- 「我々の最も平凡な日常の生活が何であるかを最も深く掴むことに依って最も深い哲学が生まれるのである」という西田幾多郎さんの言葉に深い感銘を覚えた。当たり前過ぎて見過ごしてしまいがちなところに着目することを「考える」ことのきっかけとしていきたいと感じた。当たり前であると思っていることを疑うことで、違った視点で物事を見ることにつなげていきたいと思った。
- 私にとって今日までの『奥の細道』は、受験のための暗記の薄っぺらい勉強でしかなかったと思った。本当の勉強は、「旅」「衣食住」「自然」「宇宙」などを心でとらえ、芭蕉の思想を読み深めることであると思った。この勉強が、自分の人間としての生き方を追い求めていくことに役立っていくと思いました。秋富先生の話に、また『奥の細道』の魅力に引き込まれた、とても楽しいひと時となりました。
- 芭蕉の句について、何度か目にし耳にしているが、改めて西田の純粹経験を学び、それを考えた後、俳句を読んでみると、その時その時芭蕉が目にした純粹経験 = 無常の世界が迫力あるものとして迫ってくる気がした。一つの道にこだわる、それは自分の「生」をかけて旅に出た芭蕉という人物の“生き方のすごさ”が物語っている。どんな場面でも「無」の心でその大自然にふれる、こんな世界ってやはりすごいと思いました。

【閉校式から】

柄澤 克彦 運営委員長挨拶（抜粋）

一日目の討議2，第二編『実在』についてのご指導の中で，教師にとっての「無の意識」とは，生徒のために無心になること，自分をさらけ出すことであるというお話がありました。その後の秋富先生の一言がとても印象深く残っています。「教師が無心になって，生徒そのものの実在をとらえられるのか，それはまた別である」というお言葉です。

先生のお話では，西田幾多郎の『善の研究』では，他者論については述べられていないということでした。この二日間，「純粹経験」，つまり，教師にとっては生徒そのものをそのままにとらえるには，ということを中心に大きなテーマとして学ばさせていただきました。そして，とらえた先に，どう生徒との関係を発展させていくか，それはまた，私たちが考え，疑い，問い続けなければならないことだと思います。また一つ，大きなテーマをもらった気がしました。唐澤先生をはじめ，多くの先生方が示してくださった考えや実践をもとに，今後も生徒と向き合っていきたいと思えます。

この夏期講習を通して，生徒がそのままの姿を見せてくれているから，思うようにならない他者に向き合う教師でいられること，生徒達そのものが一人ひとり違うからこそ，見えてくることがあるということに気付かせていただきました。このような機会をいただいたことに感謝いたします。

秋富先生，唐澤先生をはじめ，レポーター，司会者，記録者の先生方，この場にご参加くださった多くの方々に大変お世話になりました。二日間ありがとうございました。